

刊行にあたって

今日、TCH（上下歯列接触癖：Tooth Contacting Habit）という用語が広く浸透してきた。現在ではTCHをインターネットで検索すると、約2,700万件という膨大な検索結果が表示されるほどである。しかし当然、その内容に関してはさまざまなものがあり、我々が本来の意図しているものとは異なる場合もある。

杉崎、木野両先生が名付け親となって誕生したTCHは、2000年から始めた顎関節症の多次元評価プロトコル作成のなかで、その寄与因子として考えられた造語である。2003年の日本顎関節学会総会学術大会で、「顎関節症患者における上下歯列接触癖（TCH）の検討」として発表を行って以来、現在では顎関節症の寄与因子として広く認知されている。

その一方、この習癖が認知されるにつれ、他の歯科疾患との関連性がうかがわれるようになった。従来、歯科治療はう蝕、歯周病といった感染症との戦いで、これらの疾患はプラークコントロールにより、大きく改善することになった。しかし、プラークコントロールのみで治療がうまくいかないケースや、あきらかな原因が突き止められずに日常臨床で悩むケースにも遭遇するようになった。このような場合、その要因にいわゆる「力」が関係すると考えられ、とくに、その力として歯ぎしりやくいしばりなど夜間の強い力に焦点が当たり、その予防、対策、そして啓蒙が行われるようになった。また、日中においてもくいしばりを対象として是正、啓蒙が行われたが、それほど重きを置かれていたかといえば、必ずしもそうともいえないだろう。

このTCHという概念は、こうした背景をふまえて、いままでのくいしばりという考え方とは異なる方向性を示している。歯科医や医療関係者がいわゆるくいしばりではなく、「歯を接触させ続ける習癖」を知り、患者への啓蒙、是正を行うことで、いままでの歯科治療と違う新たな展開がなされると考えている。

本書では第1章において、TCHについての概念を明確にし、そのエビデンスも含め診査、診断、是正法について詳細に記述した。第2章では東京医科歯科大学歯学部附属病院で行われているTCHを考慮した顎関節症の治療戦略について解説し、第3章ではTCHと一般歯科疾患との関連に焦点を当て、TCH是正による効果について解説した。そして第4章では歯科衛生士などパラデンタルスタッフを活用したTCH是正や力のコントロールについて言及した。

本書が開業歯科医師、歯科衛生士のためのTCHガイドブックとして明日からの歯科臨床の一助になれば幸いである。

2016年6月

佐藤文明